

青山経営論集  
第35巻 第3号  
2000年12月

特別寄稿

# 経営学研究の50年

大島國雄



## I はじめに

青山学院大学経営学部の創設35周年にあたり、創設以来27年をここで勤め、1992年に定年退職した1教授として、ここで私としての経営学研究の50周年を回顧し、記念号へのメッセージとする。

思えば昭和21年3月10日（敗戦の翌年）のきれいに晴れわたった博多湾の風景は、私にとって忘れることができない。陸軍将校として3年間にわたる中国戦線での苦闘をおえ、東シナ海の荒海を渡り、上海からたどりついた祖国博多の島々、海の美しさ、松籟のさわやかさ、再び生きて帰ることができないと思っていたものにとって、感慨無量であった。

当時22才の私は、早速郷里（愛知）にいる両親のもとにかえり、敗戦の苦境のなかとはいえ、楽しい幸せな生活に入ることとなった。

丁度その頃、上海にあった東亜同文書院大学のほか京城帝大や台北帝大などの引揚者が中心になって、新しい文科系大学設立の話が愛知県にもちあがってきた。そしてやがて、22年4月から法経学部の新設が決定をみた。私は人生の再出発を期して、勇んでこの新しい大学（愛知大学）を受験し、合格することができた。

学生としての私の関心は経営学に向けられるようになり、2年生になると、東京商大（現・一橋大学）の教官から赴任された大石岩雄先生のゼミ門下生となったのである。先生は一橋の増地庸次郎先生の弟子であられ、年齢30を過ぎたばかりの、気鋭の少壮学者であられた。

## II 経営学研究への道

昭和25年に大学を卒業した私は、武の道から文の道へ進むことになった。国鉄最大の研究所であり、しかも外郭機関で公職追放令とは無関係の運輸調査局に勤務したが、局には高宮晋（前・東大）、江沢譲爾（前・東京商大）、細野日出男（前・高岡高商）の諸先生がおられ、まさに学問研究の府にふさわしい理想の職場であった。先輩には経営学の岩尾裕純さん（後に中央大学教授）や占部都美さん（後に神戸大学教授）もおられた。

そのうえ大石先生の兄弟子であられた古川栄一先生の御指導もあって、一橋大学産業経営研究所の研究員をも兼ねることとなり、週一回行われる国立での合同研究会の末席もけがしていた。研究会では、古川先生をはじめ藻利重隆先生、山城章先生のほか桜井信行さん、占部さん、雲嶋良雄さん、藤津清治さん、田島壮幸さんらもおられ、極めて活発な研究討論がなされていた。そこでは相互に研究者としての厳しさのなかにも、和気藹々たるものが漲っており、研究会が終わって日が沈む頃、多くのものが集まって、荻窪の飲屋で二次会をたびたびもった。

ところで戦後行われた米軍による「公職および教職追放令」は、昭和26年8月に

解除され、その結果私は昭和28年に文部省から大学専任講師の資格認定をうけることができた。そして昭和30年に運輸調査局を退き、東京都立商科短期大学の専任講師となり、32年に助教授、35年に教授となったのである。

やがて昭和41年4月に青山学院大学経営学部が発足するにともない、私は青山学院大学教授に就任した。同年には古川栄一先生の推挙により、日本学術振興会経営問題委員会の委員ともなっている。青山学院大学ではその後経営学部長もつとめ、大学紛争の苦労も味わったが、平成4年3月に定年退職するまで26年間にわたり経営学の研究と教育にたずさわってきた。青山学院大学時代の研究は、私にとって正に決定的に重要な段階であったのである。

### III 社会主義経営の研究

私の経営学研究は、その中心テーマとして企業形態論ないし企業論におかれてきた。拙著『企業形態論』（昭和51年）は一部の改訂をへて今日まで版を重ねている。ここではさらにそれとの関連で社会主義企業論ないし社会主義経営論をあげなければならない。

私が社会主義経営の研究を行った背景には、陸軍幼年学校時代にロシア語を学んだことがある。やがて陸軍士官学校に進んで、戦術論を勉強することになったが、「敵を知り、己れを知れば百戦危うからず」の兵法をはじめ、経営学でいう戦略論の基礎も学んだ。その結果、経営学の研究からいえば、資本主義経営とはことなった社会主義経営についても、科学的にこれを解明把握することが不可欠であるとの認識が、私には生まれるに到った。こうして私の経営学研究の処女作は、『社会主義企業経営論』（昭和28年）であった。それ以来近著『社会主義経営学』（平成元年）にいたるまで、7冊の社会主義経営研究の著作がある。

日本経営学会の会員のなかにも、やがて次第に社会主義経営の研究を進めるものが増加し、昭和51年には社会主義経営学会が創設されるに到った。初代会長は神戸大学の海道進教授で、2代会長は私がつとめることになった。なお社会主義経営に関連する学会として、その後ソ連東欧学会がつくられ、経済学では社会主義経済学会もある。

なお中国は1949年に社会主義体制に入ったが、いまや市場的社会主義の道を歩みつつある。私も1983年と1990年に訪中したが、中国経済が重厚長大から軽薄短小への移行を円滑に進めることを期待している。

### IV 公益事業経営の研究

私が大学卒業後まず研究にたずさわった運輸調査局は、国鉄最大の研究所として、鉄道をはじめ広い意味での公益事業の研究を行っていた。高宮先生、細野先生のほか

岩尾裕純さん、占部都美さん、そして若手の広岡治哉さんも居て、土曜日は高宮先生の御自宅にも集まって研究会を行っていた。そうした調査局での研究は、私にも公益事業の研究に関心をもたせることになったのである。

昭和29年には竹中竜雄監訳の『公益企業経営論』の共訳を行い、やがて公企業経営の研究論文を集大成して、昭和44年に『公企業の経営学』を出版した。この本はその後改訂版、新訂版として研究を進展させ、昭和50年には経営学博士論文となったものである。神戸大学で竹中先生や占部教授が審査にあられた。

戦後の昭和24年に設立されていた公益事業学会は、初代会長が蟻山政道先生、第2代会長が竹中竜雄先生、第3代会長が細野日出男先生であられ、第4代は関島政雄先生、第5代が一瀬智司教授である。私は昭和47年に竹中先生のすすめでこの学会に入会し、関島会長や一瀬会長には副会長兼事務局長として学会活動に力を入れてきた。そして平成5年に一瀬会長のあとをうけ、第6代の会長に選ばれ、その業務の重要さをしみじみ感じたものである。

規約によれば公益事業学会は、「公益事業の研究に篤志なる者協同して、それに関する知識を研鑽、普及し、公益事業の健全なる進歩発展を図り、以て公共の福祉増進に貢献しようとするものである。」電力、ガス、水道、交通、通信、放送その他の企業も特別会員となっており、まさに日本経済の基盤であり、かつ国民生活に必需的事業であって、学会としての役割はきわめて大きいといえる。研究者としての私にとって、きわめて重要な研究領域であるのである。

## V 国際比較経営の研究

経営学の研究について、いま一つあげなければならないものがある。それは最近の国際比較経営に関する研究である。

「企業の国際化傾向は、20世紀後半から新しい段階に入り、多国籍企業が普及化するようになった。その結果、経営学にも大きな影響があらわれ、いまや新たに国際比較経営論の研究が要請されるようになってきた。」

これは私の『国際比較経営論』（昭和54年）の序文に書いたものであるが、この本では「国際比較経営論を展開する一つの試みとして、現代日ソ両企業の理念と行動に焦点をあてて相互に比較研究することを課題」とした。

その後さらに『国際比較経営の新展開』（昭和62年）をあらわし、その序文で以下の如く述べている。「本書においては、現代企業の国際比較研究を行うことを課題として、日米韓中ソといった5カ国の企業経営の最近の動向を考察することとした。こうした5カ国をえらんだ背景には、これまでの大西洋時代から環太平洋時代に移行する動きを意識してのことであり、それを日本の視点から国際的に解明しようとするところにねらいがある。」

すでにわが国では経営学研究について国際比較を試みた初期のものとして、田杉競・鈴木英寿・山本安次郎・大島國雄共著の『比較経営学』（昭和45年）があるが、上記の2著はそれをふまえながら、経営の国際比較研究を試みたものである。なおごく最近の拙著として『現代日露中国経営論』（平成9年）がある。ここでは現代の日本経営、ロシア経営、中国経営の再編成を考察している。

日本での国際比較経営に若干関係ある学会として、国際公共経済学会が昭和61年に設立されており、私も常任理事になったが、今後の研究の発展を期待するところである。

以上で、昭和25年から平成12年の50年にわたる研究の歩みとする。